

田尻中学校区

茨目の六地藏

田尻にえもんという老爺があつた。

老夫婦とも貧乏であつたが、正直者で、その上大変信心深かつた。ある年の大みそか、老娼の織り上げた反物を町へ行つて売り、正月用品を仕入れてこうと老爺が町へ出かけた。

その日は折悪しく荒天で、茨目にさしかかると、道ばたの六地藏がふぶきの中に寒そうに立つておられた。信心深い老爺は、これを見て気の毒に思い、町へ出て反物を売るや、その金ですげ笠六つ、着ござ六枚買ひもとめ帰途、茨目の六体の地藏にそれぞれ着ござを着せ、すげ笠をかぶらせた。反物を売ったお金は、すっかりそのために使つてしまつた。帰宅して、老娼に話すと、老娼は夫の心を賞讃し、湯をすすつて寢床についた。

夜中、遠方より

「えもんがどこは、どこだ」

という声がし、次第に近ずいて来て、えもんの家の前に来ると

「そらッ」

と言つて、何か投げ入れた音がした。

夜明けてみると、正月用品をしこたま入れた長持ちが、庭に投げこまれてあつて、二人は温い正月を過すことが出来たと。

かたがり松

五郎作が京都の町をぶらぶら歩いている時であつた。見知らぬ若

い女が声をかけていうには、「わたくしは、実は柏崎在茨目村のかたがり松でございます。一ヶ月ばかり前に京都見物に参りました。へい、遊び過ぎたために、とうに帰る路銀が足りなくなつて困つています。しばらく路銀を貸していただけませんか。どうか。」という。余り急なことなので返答に困っていると、さらに「決して、うそは申しません。某月某日の今ごろ、かたがり松の東の枝に金をつるし、きつとお返しします。」と疑う余地のない真剣さであつたので、願ひ通りの金を貸してやつた。五郎作は、かたがり松の近くの村に住む男で、その時やはり京都見物に行つていたのであつた。

五郎作は、あらまし見物をすませて国に帰つて来た。数日たつて約束の日が来た。五郎作は柏崎へ用足しに行くかうで、かたがり松のそばを走る道を歩きながら、遠くからながめると、それらしいものは松の東の枝に見えない。やつぱりだまされたんだ」とひとりごとを言いながら、ちょうど松の下へ行つた時であつた。低くたれ下がつていた長い枝が、風もないのに、気のせいか揺れたような気がした。ひょつと見上げると松葉の茂みにまさしく、おかえしの金が耳をそろえて、つるしてあつた。その時である。五郎作は松がこずえをふるわせて、礼を言つた声を聞いた。とあとで人に語つた。茨目の西方、国道に近く田の中に、三かかえに余る一本の老松がある。千歳の枝を四方にたれて、ちょうど大きな傘を広げたやうで、夏のころはその下は涼しく、根もとは旅人の昼寝にちょうどいい。もと、この松は老松神社として祭られていたものであつた。それが明治四十年神社合併の際、村社白山神社に合祀された。この松が京都見物に行つていた一月余りというものは、葉がことごとく赤くなつて、枯れたやうになつていたという。

現在は台風、積雪などで枝が折れ、昔のおもかげがなくなってしまうが、こずえ吹く風は行きかう人人に何かを語り、ささやいているようである。

茨目の彦太郎橋

彦太郎橋は茨目地内にある橋で今は石橋をかけてある。茨目は小千谷、十日町へ行く街道に当り、下宿方面の若者が上州へ米つきに行く時はこの橋を通り田尻山の茶店に休んだもので、ずいぶん人通りのはげしいところであった。

そこで彦太郎という家のばあさんがこの橋の付近に茶店を開き、だ菓子売っていた時のことである。領主が巡見のためにご通過になりお休みなさった時、ばあさんは茶菓をもっておもてなしをした。領主はその茶の風味が誠によいというので、おほめになつていくらかの土地をたまわり、しかも記念としてこの橋に彦太郎と名付けたという。

道土橋

道土橋は大字茨目にかけてある小さな橋である。昔、天正戦国の時に椎谷坂で戦があった。椎谷方面より進んで来た軍兵は大いに敗れてしまった。その時一人の将が馬に鞭を加え逃げ出して柏崎についた。道に迷って馬首を東方に向けて来たがしばらくして気づき、

馬をとめようとして「どうどう」と言ったが馬が止まらないで走りこの橋まできて止った。そこで、どうどう橋と本来は言うのを道土橋というのであると伝えられている。

茨目の木の根橋

茨目の木の根橋といえは関東辺までも聞えている名代の橋であるが、現在は土管を伏せて水を通しておくから大抵の人はここが昔の木の根橋の所だということを知らないことは残念なことである。この橋はもと、白山神社の南端で佐藤池新田や軽井川住民の道路になったのである。東方より流れてくる灌漑用の川があるから土橋をかけて人々の通行の便を図っていたが、土橋であるために時々破損し通行の便を欠くことがあるので人々は困っていた。ある夜、白山神社がその近辺の年寄りに夢で告げて言うには、「土橋ではいくら修繕してもかきがないから松の根を伸ばして橋をかけてやる。一月許り我慢せよ」と年寄りは有難く三拝し、夢からさめたが、身体は汗でびしょり着物をぬらしていたので早朝起き出て身を清め、お礼参りをして帰宅した。

その後夢のお告げの通り一月ほどたつと木の根は伸びて、橋となつて通行に役立った。これから人呼んで「木の根橋」と言っていたが、明治になって松の根をみんな切り除いて土管を伏せて車馬の通行をよくした。

柴刀（なた）橋

下田尻から平井へ行く道に榎が一本ある。その近くを流れる川にかけた橋を「柴刀橋」という。昔源九郎義経公が北国下向の際、中鰯石村加納で一泊し、長岡方面へ行こうとしてこの地を通り過ぎようとしたが、川のため通ることができなかった。しばらく立ちながら考えていたが、一行の中に剛力無双の弁慶がいたので相談をした。弁慶が近くの農家から柴刀を借りてきて、通行人が休み場になっている場所の榎をきり、柴刀で削って川にかけ渡したので、義経一行は無事通り過ぎて行ったというので、この名がつけられた。

石抱地蔵

この地蔵は旧田尻村字両田尻の県道地蔵橋の北側にある石地蔵で名高いご利やくを持っている。昔弘法大師が北越巡錫の際にこの両田尻を御通行なされ、酒井某方へお立寄りの上、老母に冷水一杯恵みあれと願った。老母は、この地方は水が悪いがそれでもよろしければ差し上げますといわれたのに、大師は「唯一杯でよろしいからどんな水でもかれこれ申さぬ」と述べられたので、老母は望むとおり、一杯差し上げたところ、大師はぐっと一口に呑みほし「なるほど水質は悪いよ、お礼のために拙僧が良い水を出してつかわすほどに」といってそのそばの土に錫杖で地をつついたところ、水がこん

こんとして湧き出した。

後になって、ここを井戸にしようと掘ったところ、地蔵尊が石を抱えているのが出てきた。そこで地蔵尊の徳によってこんなよい水を飲むことが出来たというので、すぐに堂を建て地蔵尊をおまつりした。

またこの地蔵尊はおこりを病んだ者や乳の出ない婦人はこの地蔵尊の台に生えている苔を朝日が東天に上らないうちに、採って陰干しにして、せんじて飲めば、おこりはなおり、乳が出るという。

だき石

今から百年ばかり前、福巖院の境内鎮守明神の堂内に親鸞上人の木像が安置してあった。光円寺ではその木像を手に入れたくて所望したところ、福巖院の僧の言うには両田尻に「だき石」という梵字石があるがそれを持ってくれば、やつてもよいとのこと。そこで光円寺の世話人である茨目の村山庄大夫、同じく喜三右エ門の兩人が両田尻の酒井大肝煎方に行つて「石抱き」梵字石一つを所望したところ、「一人の力にて持てばやつてもよい」とのこと、日ごろ力自慢の喜三右エ門、この時とばかり万人力を出して、ようやく茨目村境まで持つて来た。それよりやつとのこと福巖院に納めたので、上人の木像を光円寺に奉納した。光円寺ではこれを御内仏と称して崇めると共に世話人二人の骨折りに感謝し、今もこの兩人の子孫を招待することがあるという。

水 神（河童）

昔、上田尻の加賀村の某は大変馬道楽で、とても立派な馬を一頭自慢にして飼っていた。ある夏の暑い日に作男（さくおとこ）の勇公はこの馬をつれて鯖石川原へ出かけ、一日よく働いてくれたというので帰り道、浦高堰（せき）の上で夕方一日の疲れを洗い落して帰って来た。作男は風呂場の前の柿の木につなぎ、それから馬屋へ入れようとすると、立派な尻尾に何かつかまってもじもじしている。勇公はびっくりしてよく見ると生れ立ての赤ん坊位の大ききで、目ばかりピカピカさせて口をとんがらせた気味の悪い奴だ。「馬の尻尾に烏天狗の子がひつついているぞ」と勇公が大声でどなったので、家中大騒ぎとなり、皆が出て来て燈火ですかして見ると正にそれらしい。そこで捧切れで叩き落して見ると、絵にかいたそっくりの水神（河童）だ。

「此奴を打ち殺しても後のたたりが恐しい、逃してやろう」と、そこで主人は「これ水神この度だけは助けてやるが、今後は人間の尻子玉をねらうじゃないぞ、仲間にもよくいうておけ」と言い聞かせ、その印にしりに^①という加賀村の焼印をつけ逃してやった。それ以来上田尻では一人の溺死者もなく、またしりの処には^②の焼印の跡がはつきりわかるという。

不 退 寺（ふたいじ）

下田尻の不退寺にある尊像は元輕井川の堂にあったが、ある夜里

長一部落長？の夢に、尊像を拝し有難やと感涙を流していたところ、その時のお告げに輕井川より当所に来た。早々一字を建て安置せよと言うや否や夢がさめた。不思議のことと思ひ翌朝夢に見た今の寺屋敷に行つて見たところ、松樹の下に見馴れぬ大石が土中より一mほど突出し、その上に夢の中の尊像が立つてお出でになる。また輕井川の堂守も夢によつて尋ね来りて、共々、その不思議さに感銘し、村人に頼み粗末な庵（いほり）をたて、ここに安置したが靈驗日々にあらたになるものがあつた。

当時この庵あたりは港で往来はげしい巷であつたというから、参詣人はひきもきらず、信者通夜の折に夜更けて物静かな時は、どこからともなしに読経の音が聞え、あるいは海中より松樹の上に龍燈が昇るなどの不思議なことがあつたので当時は七堂伽藍も出来たことであるが、その後、大津波のために地形が變つて、また火災にもあつて建物は焼失したが御本尊はだれが出すともなく、田の中にお出でになつたので、またまた庵を建て、安置した。大石も松樹の下に残っている。

乳房の下之三疣（みつゐぼ）

昔、田尻の村に権兵衛という男があり、その女房の乳房の下に小指の頭位の疣が三つあつた。どこの医者に診て貰つても命にかかわると取ることも出来ず、二人で毎日口説いていた。それを鎮守様の森の悪狐が聞きつけ、うまい汁を吸つてやれと考えた。翌日二人の役人が来て「御領主様の御大病、その方の女房の三疣を切り取り

煎じて飲む以外に直す方法がない」ちょうど昼食時だったので、小豆飯、油揚げが好物といつて食べて明日の返事を待つことにして帰った。

権兵衛夫婦始め親類は大騒ぎ、旦那寺の和尚さんが言うには、それは変だ、化け物か何かの仕業だ。いま一日猶予を願つて後をつけて見ようということになった。翌日正午ごろまたやって来たので例の御馳走を出し饅頭食べさせた上、まだ話が決まらないので明日お出で下さいと帰つて貰い、その後をつけてみたところ、鎮守様の大門まで来ると大きな狐になり姿を消してしまつた。正体を見届けた権兵衛は近所の猟師を頼み用意万端を整えて翌日またその役人を快く迎え、例の大御馳走の最中、障子の穴より一斉に打ち込み、五、六匹は即死、三、四匹は姿をあらわして打ち取られた。村人達はよくも悪狐を退治してくれたと大喜び、またこのことがお上へも聞え、権兵衛さんは、たぐさんのごほうびに預つたという。

銭神様

昔、田尻の村に入蔵という怠け者がいた。一日中働かずによまい物を食べているので、ある年の暮に借金がたまつて年が越せぬことになつた。親類に頼んでもだれ一人金を貸してくれる者がない。八蔵は仕方なく夜逃げをしようと鎮守様の前を通り、苦しい時の神頼みとやらで拝殿に上つてお願いをする中に眠つてしまつた。すると神様が現れ、「特別の計らいできょうの願いだけは聞いてやる。大みそかの真夜中、村の十王堂の前を銭神様が通られるから、直ちに

つかまえて、たちまち大金持になるであらう。」と仰せられるとはつと目がさめた。さてその夜十王堂に出かけ待っていると、リンリンと音がして金光りのした銭神様がお通りである。やれ嬉しやと思ひながらも余りにも目がまぶしくて手も足も出ないうちに通り過ぎて行かれた。今度こそと思つていると銀光りのした銭神様だ、だが矢張りまぶしくて足が出ないうちに通り過ぎてしまつた。くやしがつているとまた、チリンチリンの音と共に銅（あか）光りのした銭神様だ、やつとばかりに飛び出したが雪に足がすべつて仰向けに倒れ、そのすきにまた通り過ぎてしまつた。あきらめていると今度はガタガタ、ガラガラという音がして黒光りしたきたない銭神様だ、勢一杯で捕え、夜の明けるのを待つていると驚いたことに道は廢品の古鉄が山のように積まれ、八蔵は金儲けどころか後片付けに汗だくであつたという。

狐に化された女魚売

むかし、茨目から両田尻、田尻山あたりにかけて、人を化かす狐がおつたらしい。

ある日女の魚売りが柏崎（まち）の方から、茨目の村端れ、両田尻の入口あたりにさしかかった時、狐がとび出して若い女に化け、石地藏さんを赤ん坊にして、田尻山の方へ歩き出した。そうして田尻山の二軒目の家の中に入つていった。女の魚売りは狐の化けの皮をひんむいてくれようと、その家の中に入り狐の化けたのだと説明するが、家人は信じないで大騒動（そうどう）となる。そこへ托鉢

(たくはつ)の坊さんがあらわれて、仲裁(ちゅうさい)役に入り、女の魚売りが赤ん坊を殺したおわびに、尼となるため頭をそることになり、お経をとえながら、頭をまるめにかかった。話かわって、あくる朝、村の子どもが、田んぼの中でお念仏をとえながら夢中になっている女の魚売りを発見した。魚かごの中は空っぽ、そのまわりは一面に人とけものの足あとが残っていたという。

大山崎の狐

(かます頭巾の一部)

大山崎へ狐が出て人を化かす話がたくさんあった。

市太郎どんのつつあんが夕方、町から買物をして帰ってくると、一面美しい花が咲き、蝶が舞い飛んでいるのをみとれていたら、油っぽをとられてしまった。とか、

仁太郎のあにが、大山崎からヒヨイと八石山を見ると、満月が二つかがやいている。これは不思議だとみとれていたら、背中が塩引がいつの間になくなっていた。とか

田尻の方から大勢の尼さんがやって来る。これは不思議だと三右エ門が道の端によけていたら、ツットコの中に入れておいたいわしが、いつのまにかなくなっていた。とか……

また六右エ門どんのおとつつあんが新茶屋で一杯のんで歩いていくと、若い女が前を行く、ようやく追いついてふり返ってみたトタン、その女は夜目にも、はつきり恐しい磐若(はんによ)の面相、驚いたトタン、みやげの折も、女も消えていた。

また、夜ふけに大山崎へさしかかった若者が、松の木からぶら下

っている提灯(ちようちん)にたまげて、スッテンコロリンとけつまづいてころんだ拍子(ひょうし)に、にしんの束をなくしてしまった。など、たくさんある。

かます頭巾(ずきん)

精五郎ちいさんが、柏崎でおとりこしの油揚げを二十枚も買いこんで、大山崎へさしかかった。まだ昼過ぎなのに急にあたりが暗くなってきた。さては例の化かし狐が出て来たなと思って、油揚げを一枚ずつ投げてやりながら、ソロリ、ソロリと村の方へ歩いて行つた。

油揚げを放るたびに、ガアガアと鳥の鳴くような声がする。変だと思ひながら最後の一枚まで、狐にやってしまった。それでも明るくならないので、おかしいと思っていると、人の話し声が聞え、精五郎ちいさんがかぶっていたかます頭巾(ずきん)が顔の前の方へたれ下っているのを、ヒヨイととってやると、あたりがパッと明るくなった。

またしても精五郎ちいさんも大山崎の狐にだまされていたわけである。

総領の甚六

昔、田尻の村に三人の兄弟があった。

三人の兄弟のうち長男は生来少しぼんやりで気がきかないのに比べて弟の方は二人とも兄まさりであった。

家の相続人をきめる段になって、迷った親は三人の子を旅に出し、三年間に一番かせぎ高の多い者をあとりにする約束をさせて、旅に出させた。

二人の弟はさっさと旅立って行つたが、総領の兄はのんきに村はずれまで来たとき、村の子どもたちが一匹の白ねずみをつかまえていたがしらしていたのを気の毒に思い、金を出して助けてやった。白ねずみはこのご恩返しというので、総領を白ねずみの家へ案内して、大もてなしをした上、宝物の小櫃（こづち）をみやげにもらった。

三年たつて家へ帰つたところ、弟たちは五十両、七十両と大金をどっさり持つて来た。ところが総領は一銭も持つていなかったが、宝物の小櫃で、思い通りの宝（小判）がざくざくと出せたので、とうとう、ぼんやり者とみられていた総領が、あととりとなった。

ぼりやう化物

むかし、大山崎に「ぼりやう」という化けものが出て、人々を困らせた。村の者が集つて相談したが、ぼりやうの恐しさにおじけてだれ一人退治しようという者がいない。その時、力自慢で大酒飲みの剛力六蔵がやつて来たので、六蔵にたのんでぼりやうを退治してもらふことにした。

六蔵はぼりやうのやり方を知っていたので、頭に鍋（なべ）をかぶり、口にかみそりをくわえ、細びきを持つて出かけ、まんまとば

りやうをしとめたという。

ぼりやうという化物を打ちとつてみたら、功（こう）のふえた狸で尻尾（しっぽ）が二つにさけていたという。

山犬退治

上田尻の山に夫婦（めおと）の山犬がいた。仙右エ門のつつあんなが佐藤が池からの帰り道に、この山犬におそわれて、とうとそのきずがもとで死んでしまった。三ツ家の平五郎のつつあんなは草角力の大関までつとめた力自慢の剛力男、この話を聞いて、よし、おれがその山犬を退治して仙右エ門のかたきをとつてやろう。と鋭い竹槍をこしらえて、毎日山へ出かけて山犬を探しているうちに、とうとう山犬が子どもをつれて昼寝をしているところを見つけ、ヤアツと掛声もろとも山犬のあばらを目掛けて突きさし、とうとう山犬を退治してしまつたという。

山伏どんはそこにか

上田尻の加賀村の裏の堀ばたで、一人の山伏が歩いていると、土堤（どて）の上で大きな狐が一匹いい気持で昼寝をしていた。いたずら好きのこの山伏、ホラ貝を狐の耳もとでブーウと強く吹いたので、狐はたまげて、足をすべらせてコロコロころげ下の堀池にジャブーンと落ちてしまつた。やつとはえ上つた狐はうらめしそうに山

へ逃げて行った。

そのあと山伏が柏崎へ向って山道を歩いて行くと、山伏の目の前で葬式が始まり、やがて火葬となり、女の亡者があらわれて山伏を追いかけて、「山伏どんはそこにか」と追いかけて、とうとう木の下でつべんまで追いかけて、木の上から下の堀池に落ちてしまった。

堀池からやつとのことではえ上って見たら、お日さんが頭の上でカンカン照っていたという。

上田尻の石動さん

旧田尻村字上田尻の石動さんは片桐家の裏山にある松林の中に祭られてある。この石動さんは、もと前沢家でこの地に祭ったものである。前沢家は今より（大正十一年）八百年前、常陸国より移住してきたもので、酒をつくっていたので家号を常陸屋と呼んだ。先祖は大変石動さんを信仰していたので移住の際旧地の石動神のぬさを分けてもらいここにお祭りしたのである。

日ごろ信心深かったので、ある晩夢に「なんじ、われを敬すること誠に厚い、われ、なんじが家を興すことに力を尽してやるぞ」といったかと思えば眼が醒めた。そのせいかその年は酒もよく出来、またお客もふえ数年もたないうちに数百金のもうけがあつて豪家になった。その後はだれでも酒造りが出来たので村民は石動神に願をかけて酒がよく出来るように祈ったという。

平井の円山

平井の南端に円山がある。ここは鯉石川に沿って、ながめもよく、松がこんもりと茂って夏は涼を求めるに適した所である。

昔、ここに観音像を安置した堂があつた。観音像は鯉石川から見つけ出されたものといひます。ある年の戦いの折にこの村の代官が何のためか、観音堂に放火し、観音像を荷物の中に入れ、下越へ逃げてしまった。

その後、高野某というものがこのお堂跡に丸い築山をこしらつて松の木を数十本植え、「円山」と名づけたということである。

佐藤池新田の十三本塚^ぶ

旧田尻村佐藤池新田の十三本塚は平地で今は畑となつてゐるが塚は十三ある。東南は矢ヶ谷に接し東方は安田城跡に接している。この地は元安田上総介の居城の後門の通路で矢ヶ谷はそのころの弓の練習場であつた。上杉家が会津に移封されると安田家もまた従つて会津に移ることになった。

家財道具でそれほど必要でないものは、すべてこの地に埋めて塚としたと伝えられている。その数十三あるので十三本塚という。

（注）十三本塚、別に「十三仏塚」とも書く、古豪族の旧墳か

次郎が淵

昔、藤井堰の土堤がこわれ、これをなおすため方々から人夫を募った。枇杷島より次郎という美男子が来た。年令は二十二、三才でおまけに声も良かったので、娘たちは次郎にばかり心をうばわれてほかの男たちには振り向きもしなかった。しぜん他の男人夫からねたまれ、ある日水止めの際、多くの土俵と共につき落して生埋めにしてしまった。そこは今でも流れが渦をまいて「次郎が淵」と呼んでいる。

当時「あがる点検次郎さがない、いないはずだよ土俵の下」と歌ったそうである。

平井部落の由来と白山権現

平井の白山権現は百を越える石段の上の小高い丘にあり、昔は昼でも暗い処であった。

当時毎夜光明を輝かせて村人に告げをしたが怪しんで近寄るものがない。そこで近隣の重兵衛という者に夢知らせがあった。「われは佐渡国羽茂郡下抗村の鎮守、十一面観世音である。彼地は乱暴で社寺をけがすこともはなはだしいので長くとどまることを欲せず、医王薬師をとめ置いて、われはこの地へ飛んで来た。重兵衛よ、汝はわれをして白山神とあがめて当地の鎮守となせ、われもまた汝が

家とこの村を守護しよう、夢々疑うことなかれ」と言うや目が覺めた。不思議な夢、さては毎夜笹藪の中に怪火がかがやいたのは、この観世音だったのだろうかと、さっそく光明を目当てに行つて見るに、尊容赫々として観世音が立つておられた。これは有難やと背におい申して家に帰り、それから有り合せの用材で、そこに小さな社を建て、鎮守としたという。

佐渡より遠く海を越えて飛んで来たので「飛来」村という名をつけたという。（現在では「平井」と書く）村人は毎年正月十四日の夜に神前に集つて、年中の天気を占うために炭焼きをやったという。また、むし菌を治して下さるともいわれている。

佐藤が池の大蛇

昔、佐藤が池に、それはそれは大きい大蛇が住んでた。秋になると百姓がたんせいした稲をはじめ、農作物を荒すので困った。そのうちに百姓の一人が大蛇が鉄の鎗が大きらいと聞いたので、その鉄杭を打つことになったが、あとのたたりを恐れて打つ者がない。結局その土地の名主が打つことになり、打ち込んだところ、大蛇は大あばれして、天はにわかにかき曇り、雷が鳴り出した。ところが大蛇はその垂れさがった雲に乗って途中広小路の明蔵寺に休み、それより野尻湖に逃げ込んだという。その後農作物は良く出来たということである。

お里と佐藤ヶ池

昔は三十町歩の広さといわれたこの池に、七頭の大蛇が住んでいたが、その中の一蛇が下軽井川の於里（おさと）という美女を見初め毎夜通っていた。半年ほどたつて母親がこれに感づき、娘にどのだれかと問い正したが娘は答えない。そこで母親は糸を針にさし、すきをうかがつて男の着物のすそに縫いつけておいた。男はこれと知らず糸をつけながら池に帰った。翌朝になつて母親は糸をたどつて見ると池の中に入っていた。これは池の大蛇が男に化けて通つてくるに違いないと、急いで家に帰えり、このことを娘に聞かせたが驚く様子もない。「私は既に妊娠（みごもつて）しています。何の顔あつて世間の人に会うことができよう」と身仕度をして家を飛び出し、池に身を投げて死んだ。それより「里が池」といったが、これが転じて「佐藤が池」と言われるようになった。

佐藤が池が出来たわけ

昔、池の大旦那前沢家は大地主であつた。ある時、女中をからかつて、あの田圃の田植えを一日でおやしたら良いところへ嫁にしてやるといった。女中はそれを信じて喜び、一心不乱に田植をした。ところがもう少しで終るといふのに陽が暮れそうになつた。女中は残念でたまらず、苗を植えながら股から太陽を指差し、「もう少し

で終るのだ、お願いだからあそこまで上がってくれ」と頼んだところ、その願いがかなつてか、太陽はブーンと上がるは上がつたがたちまち没してしまつた。もう一息だと思つたのに無念残念と女中は蛇に化し、周囲の田圃は大きな池となつた。蛇は前沢家を遺恨に思つてか数々の仕返しをしたので、前沢家もたまらずに蛇のきらいな蛇枕を池にまいた。そのため大蛇はいたたまらずにとつと信州の野尻湖へ逃げて行つた。

佐藤池新田の庚申塔

軽井川より佐藤新田に至る里道の西側に一本の大きな藤の木が杉の大木にからまつているところに、庚申塔が建てられてあり、人人の信仰があつく、方々から参詣者があつた。この土地に遜右エ門という老人がいた。三才の幼児を長男に背負わせ、いっしょに畑仕事に來た。しばらくして長男は幼児がしようべんをしたいといふので、背中からおろし何心なくこの庚申塔の前でしようべんをさせた。老人は子どもたちがこんなことをしたとは少しも知らないで、正午ころ帰宅し、昼食後再び畑仕事に出かけた。長男は頭が痛いといつて寝た。夕方になつて老人は庚申塔をおがんで帰つたところ、ばあさんがいふには長男は何病氣か知らんが口が曲つて食事が出来ないといふ。老人はこれを聞いて大変驚き、可愛いせがれのこと、まず半田へ行つて山伏に占いをしてもらつたところ、山伏は占つていふには「これは医者と呼ぶにはおよばない。長男が庚申さんにいたずらをして、

その怒りにふれたのである。早く、お燈明と旗をあげてあやまればすくなおる。」と言った。老人は喜んで帰り、このことをばあさんに言つて二人して、お燈明をあげ一心にお参りしたところ、不思議や長男の口は元のようなおつたという。家内一同は大喜び、それからこの庚申塔を信仰したという。

軽井川の婆々清水

旧田尻村軽井川十二平の沢の奥に、きれいな清水が湧き出て、田圃の灌漑用水になっている。村人はこれを「婆々清水」と呼んでいる。

昔、ひとり住居の婆さんがここに住んでいた。年寄であつたが百姓仕事に精を出して働いていたが、生れつき酒好きで、一日も飲まないでいられない、五合の晩酌に舌づつみを打って眠るのを楽しみにしていた。ところが毎晩のことだから酒をかうお金も続かず財布はいつも空、その上酒屋への道も遠く、これをいつも苦にしていた。ところが天は人を殺さずのたとえの通り、ある夜、どこからともなくブンブンとうまそうな酒のにおいがしてきた。元より好きな婆さんのこと、その香をかきながら探していくうちに清水の湧き出ているのがみえた。さあ大変、天の神様が私にしあわせを与えてくれたものとばかり、婆さんは大喜びで手ですくって見ると酒と全く変らない味である。婆さんはそれから毎日飲みに行つていい気分になっていた。

ところがある日、婆さんは飲み過ぎべろんべろんになり、しまい

にその清水に小便をしてしまった。さあ大変、天の怒りにふれ清水はたちまち、ただの水と変り少しも酒の味がしなくなつてしまった。婆さんはしまったと後悔して天におわびしたがそのきぎめはなかつた。その後天変地変で水の量は減じたが絶えることなく続いている。

軽井川の名称

旧高田村新屋敷の東丘を他耕地（他河内または高耕地）という。土地は平たんでそこから佐水および加納に通じる山道がある。

昔、ここに一富豪が居を構えていたという。その富豪は元來開墾事業に熱心で今の軽井川地内は当時あしが生い茂つた不毛の土地であつたが某は親しく検分し、開拓すれば数十町歩の田圃が出来ると思ひ込みをつけ自分で設計した。まず、江川を掘つて西方に流通させ、次に上東方より順次下西方に向つて開拓したところが数年にならないうちに田數十町歩が出来た。ところが事業中途で惜しくも病のため他界した。住民だれ一人悲しまないものはなかった。この川が細くさらさらと軽やかに流れるので軽井川と名付けたという。富豪の息子は余りぜいたくを極めたので家は滅び土台の石までも無くなつたという。

（注）「軽井沢」または「軽井」の地名全国に多く、多くは夏季水涸れの地勢のところを示す。当軽井川も地形、地質もまた水涸れの条件等を異にせず。

軽井川はこの地方では訛つて「カレゴ」と呼ぶ

軽井川の崩塚（ぐずれづか）

旧田尻村字軽井川金蔵入（かなざかいり）に枝ぶりの美しい松が一本ある。崩れ塚の名を後世に伝えようと村民が植えたので言ってみれば墓標の役をしているのである。

昔下軽井川の農民とも協同して、新田を開墾し数町歩を得たが、灌漑に困り、矢ヶ谷に用水池を築いた。その工事中、土が崩れ二人の命を奪われたので一同相談して一つの塚を築いて、二人のなきがらを埋め、その上に松を植えたという。そこで「崩れ塚」と名をつけた。

（注）この塚山の松は別名「天狗松」とも呼ばれ、旧鏡里小学校跡のうら山にある。

だるだ松

下軽井川地内にある老松で、木は東南方に傾いている。ある年、村の大工某が深夜仕事に疲れ、あがり酒を一杯きこしめして、いい気分で半田より山道を通って家へ帰るとき、その松のそばを通ったところ突然「だるだ、だるだ。」とつづげざまに呼ぶものがある。大工は驚いて道具箱をほうり出して、わが家目がけて、いちもくさんに逃げ出したという。それからこの松を「だるだ松」というよう

になった。

萩平の首切観音

旧田尻村上軽井川の南端に萩平という所がある。首切観音といって一石像があるが、首の方は下田尻に安置され、ここには胴と台石があるばかりだ。昔は随分ごりやくを現わし、人々に崇拜されたものである。ある年この観音が関矢某のまくら元に立っているには、「おのれはこの土地を離れて下田尻へ行きたくなった。どうか、おのれの首をいであえしてくれ」とたのんだ。十晩も同じ夢を見たので不思議に思い、香花を供えて後、首を切り取って下田尻へ移した。その日が三月十八日であるというので、この日は土地の人々は小豆飯を炊き休みにするという。首切り観音の名はこれよりはじまったのである。

軽井川の薬師如来

旧田尻村上軽井川の裏山に一堂宇があつて、薬師如来が安置してある。村民の参拝多く奉納旗などが沢山並んでいる。

この地は長者堀といつて昔長者某の住んだ所といわれている。その長者某がある年京都見物をした際加州地方より持ち帰ったもので、この如来を信じると婦人一切の病気をなおすという評判があった。しかしその後長者某はぜいたくを極めたために、落ちぶれ財産を使

い果し、この地に住むことが出来ず、如来を地中に埋めどもなく立ち去った。それから幾年経ったかわからないが、関矢某がこの地を開墾し畑としたとき一本の大きな木株の下から掘り出したもの、これがうわさのあった如来である和大いに喜び、三拝九拝してその地に一字を建て安置したという。

(注) この薬師堂は現存、関矢家の私仏的奉祀をうけている。

軽井川の夫婦岩

旧田尻村上軽井川の熊野神社の前の田圃の中に大きな石が二箇並んでいる。村人はこの石を夫婦石と呼んでいる。昔この田主がどうも耕作するのに邪魔になるというので、掘り上げて庭石にしようと思ひ、おおぜいの人夫を頼んで掘ってみたが掘り上げることが出来なかった。その日は暮れてしまったので中止し明日再び掘り上げることにして帰宅した。その夜一人の老人が田主のまくらもとに立つていうには「私はお前の田に住んでいる石である、われわれ夫婦を人夫にかけて掘り上げ、離別させようとするのはかわいそうではないか、いよいよ明日も続けて掘るならば、われは汝の家にたたりをなすぞ、それでも掘り取るかどうか、もしこのままにして置くならば、われは汝の家を守るであろう。」と云って立ち去った。主人は不思議に思つて夢からさめた。そこで翌日は掘ることを思い止め再び石を田圃の中に埋めたという。それでこの石を夫婦石とよんでいる。

(注) この石はこのような伝説があつたが結局掘り上げられて、その家の庭石になった。大正末年まで田圃の中にあつたが……。

軽井川の脚気地蔵

脚気地蔵は旧田尻村上軽井川上組の新三郎坂南方にあり。昔は長者某のおつた所であつて平ら地で、ながめがよい。長者某はずつと脚気を煩つて、歩行が不自由なのを苦にして死んだという。死んでから数年も経たないうちに、貧乏になり、子孫はちりぢりばらばらになつてしまった。一家がこの地を去るとき、朱がめと黄金いくらかを埋めその上に地蔵の尊像を石に彫つて安置して去つたという。脚気長者のおつた所であるからだれいうとなく脚気地蔵と呼ぶようになった。脚気を煩うものが、もしこの地蔵尊を信心するときは、たちまち全治すると伝えられている。

(注) 現在はその石地蔵はなく、自然石が一箇あり、そばに老松が一本立っている。

都落ちの武士

上軽井川のある家に秋の真夜中近く一夜の宿を請(こ)うものがあった。戸を開けて月明りを見ると、疲れ果てた一人の武士が立って

おり、足や手にかなりの刀傷が見られたが顔には何とも言えない氣品が漂い、身分のある人のようであった。また手に立派な刀を杖の代りにし、背には大そう重そうに何かかついでいた。一夜を明かした武士はその家の主人に厚く礼を言つて、いざ出発しようとしたが、背の荷物が重くて歩けそうもない。そこで主人が見かねて自分でその荷物を背負つて送ることにした。しばらく歩いて人家もない山中に來た時、武士はこれから自分で背負つて行くから歸つてくれと主人に言つた。主人もそう遠くまで送ることが出来ないのて別れを告げて歸りかけたが心配でならない。そこで木陰よりそとのぞいて見ているに武士は木陰に大きな穴を掘つて荷物を埋めて立ち去つた。

その後主人は何回となくそこに行つて見たが一向に掘り出した様子がない。不思議に思つて、ある日掘つて見たところ驚いたことに金銀の財宝が袋一杯あつたという。

長者堀

上軽井川から安田へ越す処に長者堀と名づくる所がある。

昔、長者が住んでいたと言ひ伝えられている。この長者が滅亡のとき黄金造りの馬をつつじの木の下に埋めておいたというので、その後心あたりの場所を掘つたが出て來なかつた。

鳥越（とりごえ）の稲荷堂（いなりどう）

稲荷さんが北条の愛宕神へ通つたという珍らしい話がある。安田

から北条に通じる間には鱒石川がある。昔は舟渡しして通行は大変不便であつた。だから鳥越には舟渡しを営んで生活していたものが数軒あつたが、どの家も裕福に暮らしていた。小坂山は樹木がうっそうとして茂つて、夜中は特に寂しい所であるから、雪中などは夜になるとほとんど通行止めの感であつた。渡しよりも、雪夜になると呼び起されてもいやがるので増賃を出してもらつていた。そのころ大変怪しい扮装をした一青年が毎日四、五回ずつ呼び起しては渡るが増賃も出さないし、また無言である。渡しもり達は互にこの青年は何人でどこへ行くのか判断に苦しんでいたが快く渡してやつていた。ある闇夜で細雨の降る夜、だれ一人通行する者もないのに、例の男装の青年がやつてきた。時間は遅いし、ただ一人で渡してくれと頼んだ。そこで快く渡してやり今夜こそ正体を見届けてやろうと、足音をしのばせて後を追つて行つたが、追分けにある觀音像の所まで來ると姿が見えなくなつた。どこへ隠れたのか、キヨロ、キヨロしているとうの方でギーッと音がした。すると頭分株（かしらぶんかぶ）の老人がいうには、近ごろ安田方面から男装した男が愛宕山へ通う話が北条方面にあるがきつと稲荷様かも知れん皆の者粗末に取扱つてはならないぞと言われた。それでギーッという音もわかつた。数年後鳥越に傷寒病（はげしい熱病）が流行し、多くの人々が倒れたが、渡船業者は一人も煩うものがない。渡船業者もまた毎夜燈明を献じて稲荷様に病にからぬようにと祈つた。ある夜、年長者がお詣りするとその場に眠つてしまつた。そして神のお告げには「疫病にからぬのはわが守るからで数年前にお前達から無賃で乗船させてもらったから、今そのお礼をするのだ。病氣もだんだん下火になつてきた安心せよ」と、やれ嬉しやと声をたてて目ざめれば

夢で、自分は稻荷堂の中に寝ていた。正しく神のお告げと喜び勇んで部落民に語り信仰も怠らなかつたのでだれ一人として悪疫にかからず、またお告げの通り疫病もやんだという。

鳥越河原の水溜り

旧田尻村鳥越の第一鉄橋下に水溜りがある。いくら埋めても土砂はどこへ行くのか、また水溜りとなるという。昔鱒石川はその辺を流れたものであるが、西風のために東方を流れるように変つた。しかし以前は淵であつたから鳥越の人々は夏時は夕暮になると水泳に出かけ、一つの遊泳場としていた。ある時、某の幼児が誤つてその淵に転落し溺死した。そのおんりょうによつて流域が變つてもその淵だけは水溜りとなり、いくら土砂を入れても埋まらないという。

上方詣りの藤

旧田尻村字鳥越に年を経た藤がある。伝えているには、この藤は上方詣をしたという。

ある年、柏崎西光寺松の主催で莢目松や、停車場松と相談して上方詣りをすることに決つた。その時停車場松は鳥越藤に向つていうには「おれとお前は一つ村にいる知りあいである。幸い上方詣りの主催者があるが仲間入りをして、いっしょに行かないか、お前は随分愛きょう者だから連れになつてくれれば、我々も嬉しい」と勧め

たので、藤も同意して松とともに上方詣りをしたという。

鳥越の地藏尊

旧田尻村字鳥越の地藏尊というのは齒の病を全治するごりやくがあるというので、当時は四方八方より参詣人がきた。

この無頼（あこなし）地藏は安田上総介が安田城にいた時に土地の人々が余りにも口の中の病氣に悩むのを聞いて、何とか良いくふうはないものかと思案、時、たまたま、川中島の合戦となり、信州へ出陣した。この時路傍に口の中の病で無頼地藏に祈念した札のあるのを見て、大へん喜び、これを幸いと帰国の時、ひそかにその地藏を自分の馬に乗せて帰えり、安田城の入口に安置したのがこの地藏尊であるという。

上方詣りの伴松（ともまつ）

安田停車場の東方に、大きい忠魂碑がたててある。ここに一本の古松が、ひとりさびしげにして碑を護っている。「上方詣りの伴松」とはこの松のことである。ある年、柏崎西光寺の松と莢目の松が上方詣りしようとして、この松にも「いっしょに行かんか」とさそつた。松は「わたしも大賛成ですが、まだ君たちほど年数を経っていないので路銀がない」といつた。その時、莢目の松がいうには「それならば、ぼくらの荷物をかついでいけ、はたご賃は半額だけおれたち二人が

助けてやるからともをしなさい」と言った。安田の松は喜んで賛成し、二人の荷物をかついで上方詣りをした。それでこの松を「上方詣りの伴松」という。

安田の豆焼鉾泉

安田の明神部落に「豆焼鉾泉」というところがある。昔、六十才ばかりの老婆がいた。もとから農家のことであるので秋九月になって、豆引きに畑へ出かけた。ところが豆引きの途中誤って、水たまりの中へ一わ落してしまった。しばらくして引き上げて見たところさや豆は残らず煮たように柔かくなっていた。これは不思議だとその水をくんで手にとってみると、温かく、しかも湯花が白くかたまっている。そこで、ためしにはだかになって入ってみたところ、皮膚（ひふ）病をなおすききめがあることがわかった。さや豆がよく煮いたというので豆焼という名がついたという。その後地震のために地盤に変動があつたためか、今ではわずかししか出ていない。

明神の道祖神

安田の明神に道祖神がある。昔、上杉謙信がこの辺を支配していたころ、突然戦争が起り上杉軍は昼夜をついで戦場に急行した。余りの強行軍に疲れ果てて倒れた者も多く出たが、急を要するために倒れた者はそのまま置き去りにされた。

甚右衛門もその一人であり、疲労もしていたが彼の足の裏は一つ大きな水ぶくれとなり、とうてい歩くことが出来なかった。そこで彼は道ばたの石に腰を掛け、遠く去って行く味方を見送りながら無念の涙をはらはらと流した。小さい時から大將にあこがれ武士であつた父に頼んで武士になり、今までに幾度か戦場でも手柄を立て続けてきたことを思うと、どうしても皆とともに行きたくて、腰をかけていた石に泣きくずれて頼んだ。「もしお前が私の足を本日中になおしてくれるなら、お前を道祖神として厚く祭ろう」というや否やその石は武士の願いを知ってか、知らずか、うなり、すぐ様にぐらぐらと揺れたのである。すると不思議や足はみるみる全快して体中にもりもりと元気がわいてきたではないか。そこでこの石を小さな社を建てて祭つたのが、この道祖神であり、耳の病の神としても近隣に知られている。

大沢の忠奈ヶ池

旧田尻村安田の南端に当って大沢という所があり、そこに忠奈ヶ池といつて周囲十五、六間もある小さな池がある。深さも相当あるとのこと、昔榊井川に大工を職業とする某がいた。

性質は大変おとなしく母に仕えて孝行者である。ある日母が造つた焼餅を袋に入れ大工道具をもって大沢へ行った。正午ころになつたので昼食にしようと思つて、焼餅を取り出して食べはじめたところ、誤つて地上に落した。ころころと転がり落ちた焼餅を拾うとして急ぎ足で谷下におりる途端に忠奈を足先でけとばしてしまつたの

で、忠奈は焼餅と相前後して、転々として池の中に落ちてしまい、取ることが出来なかった。そこでその忠奈がそのままこの池の主になったのである。

(注) 忠奈は大工道具の「ちょうな」のことと思われる。

安田の耳垂神 (みみんだれさん)

安田の慶福寺の裏路に耳垂神といって、耳疾を煩(わづら)う人が願をかければ必ず全治するというありがたい神様が祭られている。礼詣りには奉納旗一本でよろしいと伝えられている。昔、軽井川の若者某が安田の明後沢に情婦を持って、毎夜この境内でデートを楽しみにしていた。ところが情婦は耳疾を煩い、うみが出て臭気で鼻もつぶれるほどであった。そのため若者は次第にいやけがさしてきた。情婦は心寂しくなり、これをなおしたいと思ったが近所に医者がなく困っていた。ふと思いついたのはこの石神様である。お願いをしようと心願を始めた。向う三年間はもちは食べません。命は二年位短縮されてもかまいませんから、どうかこの病気をなおしてくださいとお願ひすること三、七、二十一日であった。念力岩をも通すで耳疾は次第になおった。情婦は大へん喜んで、これも神様のお陰と三拜九拝して若者に会った。若者某も耳病がなおったので相互に楽しみを続けたという。それから耳垂神というようになったという。

安田の古川稲荷

安田の古川稲荷は部落十三軒が稲荷講をつくって毎年四月十六日と九月十六日盛んなお祭りをして尊敬していた。

ある年神社を一つにしようという相談がまとまって、この稲荷も十二社に祀られるようになった。ところがそれから毎夜庭山家の主人の夢の中に稲荷の神様が現われて

「わしは十二社に合併してまつられたが、他の神様の宿借りする事はいやでいやで仕方がない。こやし臭くてもいいから、もとの古川の地に帰りたい」

と訴えられるので、庭山家の主人は十三軒と相談して、古川の昔の祠に稲荷の神をおうつし申しあげたということである。

安田の道楽神

安田の道楽神といえは鮎石街道中に名を知られていて、信者がたくさんある。殊に酒造業や糶業者が信心するとその効果が顕著であったという。この近くに小店を開いて濁酒を売っていた老人があった。その老人は新酒を醸造すると必ず一壺(びん)をお供えすると十数年も続いた。そこで二、三日経てから空壺になつていれば、その年は必ず酒がよく出来ると言っていた。ある年例により一壺を供え、二、三日してその壺を見ると酒がある。これは不思議だ、本

(注) 道楽神というのは、この地方(刈羽郡一帯)道祖神の呼び名をなまつて「ドウラクジン」と発音する習癖がある

観法庵無尽堂は安田姥ヶ谷にある尼堂で「むじな堂」という。本尊は正観音を左に、無尽菩薩と右に安置し、弘法大師の彫刻で何事でもお願いすればかなえてやるといふ有難い観音である。

— 1 2 7 —

ある晩、姥ヶ谷の林の中の茂みにかくれ、むじなが出て来るのを待っていました。某も棒切れを持ってかくれていました。月はこうこうとして白昼のような夜、むじなが出てきましたので、犬はすぐ食いつきました。しかしながら何分年老いた悲しさ、むじなにかなわず、数箇所の傷を負ってたおれようします。そこで某は犬に加勢してやったので犬は元氣を出して、とうとうむじなをたおしてしまいました。しばらくして犬もまたたおれました。

某は近隣の人を呼び集め、わけを語ったところ、近所の人々も大変喜んで犬に同情し、むじなと一しよに埋葬しました。そうしているうちに秋になるとむじなは霊が出て畑のそば、麦を荒らしたので、またまた相談の末、むじなを無尽菩薩に、犬を正観音に尊崇し弘法大師が彫刻されたという尊像を安置し、一堂を建てました。これが無尽堂で世間でいう「むじな堂」であります。

於七（おしち）が怪火

旧田尻村安田の北谷に於七という大変美人がいた。丹華（たんか）のくちびる、芙蓉（ふよう）の額、鯖石郷一の美人であつたので、袖を引くもの、あるいはめとりを望むもの数多くあつたがどうしたわけかウンと言わない。

いろ男たちはますます、よだれを垂らして言い寄るけれども、ひじ鉄砲を食わせられ何としても手のつけようがなかった。ある年、何が原因かはわからないが村の若者たちに憎まれ、一夜家の入口をみんな釘で打ちつけられ開くことが出来ないようにされ、その上放火された。火は炎々と燃えあがつた。さあ火事だとはね起き寝巻の

まま飛び出したけれども、四方みなきびしく閉ざされていたために出ることが出来ずとうとう焼け死んでしまった。それから、しとしと雨の降る夜になると、怪火が出てあちら、こちらと飛び回ったが今でも時々見る人があるという。

安田北谷の地藏尊

南無地藏尊菩薩の奉納旗のある石仏六体が安田北谷の丘の上に安置されている。昔、佐渡国に安置されていたのであるが、いつのころか、この地にとびきたったものであつて、北谷住民は夢告げによつて小堂を建てて祭つた。靈驗あらたかで信仰者は日々に多くなつた。後年佐渡の住民地藏尊の夢告げによつてわざわざこの地に渡り詣つたこともあつた。人がもし乗馬して堂のそばの路上を通行する時は必ず落馬するので、村民は乗馬しても堂の前に来ると必ず下馬することになっていた。

一体は胴を袈裟（けさ）がけに切られてあつたが、佐渡にあつたとき、信者の身代りとなつて切られたのだという。この地のもの、別に頭を作つて安置した。寄付地が若干あつたが、支配人某が、ひそかに売つて私腹をこやしたために仏罰によつて暴れ死んだという。

姥ヶ谷の清水地藏尊

安田というところは「姥ヶ谷」からだんだんひらけて、「三ツ家」「中道（なかなどう）」「鳥越」とひらけていったものだという。

すなわち安田の先祖地はこの姥ヶ谷である。安田は山地から始まったもので、安田上総介の栄えたころは南谷、北谷といつて家がたくさん立ち並んでいた。昔、この地を開いた人がここに家を構えたが飲料水に困まり、あっち、こっちと掘ってみたが、どうも思うように水が出なかった。ところがある夜、夢に「われは汝が日ごろ信仰する地藏尊である。彼の〇〇地辺を掘ってみよ、必ず水質の良い水が出る。」というお告げがあった。

翌朝になってお告げの地を掘ったところ、くわ先にカチリと当るものがあり、何物かと掘りあげて見れば、これはまた石に刻んだ立派な地藏尊であつて、その下より透き通るばかりのきれいな水が、こんこんとわき出てきた。これはほんとうにありがたいことだと、その地藏尊をおまつりして、その名を「清水地藏尊」といった。清水は今日に至っても尽きない。夏になると、手の切れるような冷たい水をくみに訪れる人は少なくない。

可愛や新左

昔、安田の明後沢に新左衛門という大庄屋がいた。ところが庄屋の権力に対してはだれ一人文句をつける者がいないのでなすことすべて農民を苦しめた。ことに年貢の取り方がいたって不公平であり、残酷極まる極非道であつた。我慢していた住民もいたたまらず、とうとうみんなで相談して、ある闇の晩、矢来をつくり、火をつけて焼死させた。

雨の降る晩になると庄屋の魂であろうか、火の玉のようになり、「可愛や新左」とひとりごとを言つて去り回つたという。

狐の嫁取り

昔、安田の明後沢に太七新佐エ門という代官がいた。この人は上の池と下の池という二つの大きな池を作り、この用水で安田一帯の田地をうるおすことを始めたほどの農業熱心であつた。というのも彼は代官であると同時にこの地の大地主でもあつたのである。ところがこの代官の年貢のとり方が不公平であり、きびしくてひどかつたので、じつとがまんしていた百姓もとうとう勘忍袋のおが切れて、「代官をやっつける」と手に手に日ごろ愛用のくわ、かま、棒を持つてむしろ旗を先頭に代官の屋敷へ押しかけ「代官出てこい」と口々にどなり、石を投げこんだ。驚いた代官は小雨ししばと降る夜中に、こそこそと蒲原の方へ逃げて行つた。その途中、今まで自分の田であつた所をちようちんで照らして、名残りを惜んだという。それから後、代官は再び帰えることはなかったけれど、小雨のししばと降る夜はきまつて代官の田であつたところに、二、三のちようちんの火のようなものが上下しながら太七の田であつたところを回るといふ。しかもこのようすが如何にも行列を想像させるので、後世だれいともなくこの火のことを狐の嫁入りというようになった。

